



# リーダーシップの意味構成 解釈主義的アプローチ による実践理論の探求

片岡, 登

---

(Degree)

博士 (経営学)

(Date of Degree)

2009-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4772

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004772>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名 片岡 登  
博士の専攻分野の名称 博士（経営学）  
学 位 記 番 号 博い第 4772 号  
学位授与の要件 学位規則第 5 条第 1 項該当  
学位授与の日付 平成 21 年 9 月 25 日

【 学位論文題目 】

リーダーシップの意味構成 解釈主義的アプローチによる実践理論の探求

審 査 委 員

主 査 教 授 金井 壽宏  
教 授 坂下 昭宣  
教 授 平野 光俊

## 論文内容の要旨

本論文は、アルフレッド・シュッツの現象学的社会学の方法論に依拠した「解釈主義的アプローチ」を、経営学におけるリーダーシップ論に本格適用した研究である。リーダーシップの実践理論は、外部から直接把握できる客観的実在物ではなく、リーダーである行為者の意味世界としての社会的構成物であると仮定されている。本論文は、解釈主義的アプローチに緻密かつ厳密に基づいて、このリーダーシップの実践理論を探求している。

上記の目的に沿って、本論文は9章で構成されている。第1章、第1部の理論編（第2章～第4章）、第2部のデータ編（第5章～第8章）、第9章から成り立っている。

第1章では、本研究の目的である筆者の研究関心に触れながら、リーダーシップの実践理論の位置づけについて記述されている。

続く第1部の理論編（第2章～第4章）では、リーダーシップの実践理論を探求するための方法論上の論点について記述がなされている。第2章では、バーレル&モーガンの認識論的パラダイムを手がかりに、社会科学における研究対象へのアプローチについて文献レビューがなされている。レビューを踏まえての主要な議論はつぎのとおりである。認識論的パラダイムは、「主観-客観次元」によって主観主義者の社会科学的方法論と客観主義者の社会科学的方法論にわかれる。この社会科学の現状を念頭に、テーマとして取り上げるリーダーシップの実践理論は、行為者の意識作用の産物である意味世界であると仮定していることから、この研究では前者の主観主義者の社会科学的方法論に依拠していることが明示される。従来、ベニス他の研究などに見られるように、リーダーシップ研究において主観主義者の社会科学的方法論を採用していると思われる研究が皆無というわけではないが、そのような研究は少ないうえに、その方法論上の基盤は、ベニス他の研究も含めて曖昧であった。この章では、このようにして、社会科学における方法論上の論点についての整理がなされている。

第3章では、主観主義者の社会科学的方法論の1つである現象学的社会学の方法論を文献レビューしつつ、自らの立場を明らかにしている。リーダーシップの実践理論を行為者の意識作用の産物である意味世界として仮定した場合、現象学的社

## 学位論文審査要旨

氏名 片岡 登

論題 リーダーシップの意味構成：  
解釈主義的アプローチによる実践理論の探求

審査 平成21年9月

神戸大学

社会学の方法論のフレームと親和性が高いと考えられた。そのために、現象学的社会学の立場から、リーダーである行為者の1次的構成概念と研究者の2次的構成概念をいかに近似させていくのかについての方法論が探索された。行為者と研究者が社会的直接世界において対面状況にある場合、そこには物語・語りが存在する。その物語とは、リーダーである行為者自身の経験（＝主観的事実）を再構成したものにほかならない。リーダーである行為者の語りには、対話の聞き手（＝研究者）の存在が欠かせない。このことを明らかにした上で、リーダーシップの実践理論を探求していく上での、物語・語りの特性が記述されている。

第4章では、記憶に関する研究分野の文献レビューがなされ、本研究が扱う行為者の物語が記憶に基づいていることの持つ意味合いが論じられている。まず、物語は自分自身の経験であることから、記憶の特性を理解しておかなければならない。さらに、記憶には、エピソード記憶、意味記憶、手続き記憶があるが、エピソード記憶と意味記憶のなかの個人的意味記憶が、経験とそれに対する意味づけに関与している点が見逃せない。エピソード記憶は有意義的体験と近似する概念であり、個人的意味記憶は理由動機の意味や意味連関と近似する概念である。記憶は、その時々現在の現在において想起される。本章では、以上の論点が詳細に論じられている。

第2部データ分析編（第5章～第8章）では、理論編で記述された方法論上の論点を踏まえて実施されたインタビュー調査とその分析が取り上げられる。行為者の意識作用の産物である意味世界としてのリーダーシップの実践理論がデータ分析の結果、浮かび上がってくる。

第5章では、調査方法が示されている。行為者の意味世界にアプローチするには、行為者と研究者との対話を重視した深層インタビューが適しているが、語りのきつかけとなる問いを用意していることから、深層インタビューにより近い準構造化インタビューを採用しているといえる。インタビュー調査は、シュッツの現象学的社会学における「適合性の公準」を具体的に満たすよう、2回のインタビューを実施している。第1回インタビューにより研究者が意味構成した2次的構成概念を、第2回インタビューにおいて、行為者が理解可能かどうかを確認するのである。そこで得られた意味コードは、行為者の1次的構成概念に、より近似していることになる。また2回のインタビューでは、それぞれ切り口の違う別の問いを用意することによって、リーダーシップの実践理論を多面的・複合的に捉える試みも行われている。

第6章では、「適合性の公準」の実践について記述されている。第1回インタビューの逐語録をもとに、リーダーシップ語録（＝2次的構成概念）が作成されている。このリーダーシップ語録は、第2回インタビューにおいて、行為者によって理解可能かどうかの確認が行われている。そのなかから、さらに重要な意味コードとして、行為者によって42個の意味コードが選択されている。この42個の意味コードは、シュッツの示した「適合性の公準」を満たしていることから、より行為者の1次的構成概念に近似している意味コードである。

第7章では、行為者の語る有意義的体験とそれに対する理由動機の意味についての分析が行われている。理由動機の意味は行為者による意味構成でなければならないが、ここでは研究者が行為者の理由動機の意味を推測して、2次的構成概念として意味構成している。有意義的体験80個とその体験に対する110個の理由動機の意味は、有意義的体験における行為者の立ち位置によって、「行為者がリーダー役」「行為者がフォロワー役」、行為者がリーダー役・フォロワー役のどちらにも属さないところの「その他」に分類されている。有意義的体験は行為者ごとに経験連関として、意味連関（＝個人的意味記憶）の背景になっている。

第8章では、第6章および第7章において抽出された意味コードに、さらに複数の意味コードを追加している。「意味連関に関する意味コード」「自身のリーダー像に関する意味コード」である。これらの複数の意味コードを行為者個人のなかに統合させて、行為者ごとのリーダーシップの実践理論を構成している。行為者のなかで、意味が近似すると思われる意味コードをグルーピングすることで、行為者のリーダーシップの実践理論を構成する軸が見えてくる。それぞれの軸には典型的意味コードが設定されており、これらの意味コードの志向性は、「自己志向性」「他者志向性」「仕事志向性」のいずれかであることが明らかになっている。

最終章となる第9章では、本研究の要約と研究成果、理論的・方法論的貢献、実践的貢献、今後の研究課題について記述している。

## 論文審査の結果の要旨

本論文の貢献点は、つぎの3点に求められる。

第1に、リーダーシップ研究におけるリーダー自身による意味構成というオリジナルな領域を開拓し、それが成り立つことを、精密に提示した点に求められる。行為者であるリーダー自身が、研究者の問い掛けを導きの糸としつつも、自分自身のおこなった行為、また、くぐってきた経験を対話のなかから、意味構成する場を研究者が創出することに成功した。その結果、リーダーという行為者自身の1次的構成物に接近することができた。

なお、既存研究のなかにも、米国におけるリーダーシップの研究と教育の機関であるCCL (Center for Creative Leadership) などによる、リーダー経験に注目した諸研究は存在する。しかしそれらとて、経験を行為の意味構成として捉えるものではなく、出来事(イベント)を行為者個人から切り離してリストするに留まっている。また他方で、研究者が構築するフォーマルな理論よりも、実務家が抱く実践的な持論のほうを尊重すべきだという「持論アプローチ」も姿を見せ始めているが、それらは持論の解説法について確固たる方法論的基礎を持たないままであった。

最近ではリーダーシップの把握をフォロワーの主観に求めるリーダーシップ研究も注目され始めてきているが、リーダーシップの把握をリーダー自身の主観に求めるリーダーシップ研究が見当たらないのは、明らかにリーダーシップ研究における欠落であるといえる。リーダーシップがリーダーとフォロワーのダイナミックな相互作用であるならば、リーダーシップの把握をリーダーの主観に求めるリーダーシップ研究がなければならない。この意味で本論文が、リーダーシップ論にリーダーである行為者の意味構成という観点からアプローチしうることを示した功績はきわめて大きい。

第2に、この行為の意味構成という研究テーマに適合した方法論を採用している点が、本論文の価値を高めている。アルフレッド・シュッツの現象学的社会学の方法論を、これほど純化して適用した研究は、内外ともに類例がない。

従来、経営学の枠内では実践的含意が求められるために、操作変数間の因果関係を探る実証主義的、法則定立的アプローチが主流である。そのため、研究者の側は調査協力者の意味的世界に対話を通じて入り込むことはしなかった。つまり、リーダーシップの研究においては、リーダーが実際にどのような考えをもって行為しているの

か、あるいは、行為の結果その行為をどのように意味づけているのか、を深く考察してこなかった。もっばら、研究者が取り上げたい変数をあらかじめ決め、それを操作的に定義して測定し、変数間の関係を見ることに終始してきたのである。

それはそれで必要かもしれないが、他方、リーダーという行為者自身の行為を意味構成することなく、リーダーシップ現象を理解することはできないはずである。そのため、質的調査を量的調査と併用する「方法論的トライアングレーション」が試みられてきたこともあった。しかしその場合、現象学的アプローチあるいは解釈学的アプローチを採用したと謳われている場合でも、調査の初期段階はそのとおりであっても、仕上げるまでには、実証主義的アプローチが混在させられることが多かったのである。

本論文は、その点、リーダーのインタビューの解釈が、厳密な現象学的社会学の方法における基準を満たす形でなされている。この意味で、方法論的な純化の度合いにおいても、稀にみる多大な貢献を果たしているのである。

第3に、これはさきの2点に比べるとやや副次的なものではあるが、ともすれば現象学的社会学や解釈学、さらにエスノグラフィーやエスノメソドロジーも含めて、質的研究ではなかなか実践的含意を引き出せないし、またたとえそれが引き出せても、行為者によって生きられるままの世界の記述ができればよいと考えられてきた向きがある。

その点、著者は社会人として、またリーダーシップ育成を含む人材育成のプロとして、現象学的社会学にもとづくリーダーシップの意味構成を実現するために、場を創出することや、対話(ダイアログ)をすることが、ほかならぬ調査協力者の持論を豊かなテクスチャーのなかで引き出すのに実践的にも役立つことを、この論文で証明してみせた。ダイアログが大切だという認識が、人材教育論の分野でも指摘されつつあるが、それをソリッドな方法に基づきつつ実践的に提示した点に、本論文の第3の貢献を見出すことができるのである。事実、調査協力者は2回のインタビューの結果、自分の考えを持論という形で深めることができたのであった。

シュッツがオーストリアでも、あるいは米国に移ったあとでも、銀行に勤める社会人でありながら、現象学的社会学を樹立したように、本論文の著者もまた社会人として、仕事の手を休めることなく働きながら、人材育成の実践に役立つことを念じて、この研究を成就したことも、特筆すべきであろう。本論文の冒頭のエピグラム(それ

は、結論でもまた再びふれられるのだが)が、この研究の性質をよく示しているといわなくてはならない。

このようなすぐれた貢献を成し遂げた本論文ではあるが、必ずしもすべてを解明し尽くしたというわけではない。リーダーシップ現象は、リーダーという行為者とフォロワーたちという行為者の間のダイナミックな相互作用から生まれる社会現象であるゆえ、リーダーの行為を意味構成するだけでなく、そのリーダーに喜んでついていくことになった(あるいは、最初は反発していた)フォロワーたちの行為を意味構成することも不可欠である。

しかし、これは本論文の限界というよりは、有望な方向性を示唆するものであって、著者自身も、本論文の想定する範囲には、フォロワー視点がカバーできていないことを十分に自覚している。そのうえで、この論文で打ち止めではなく、リーダーの意味構成とフォロワーの意味構成を融合するような研究が今後望まれることを、自ら指摘している点を付言しておきたい。

以上の理由から、審査委員は、本論文の著者が、博士(経営学)の学位を授与されるに十分な資質を持つものと判断する。

平成21年9月16日

審査委員	主査	教授	金井 壽宏
		教授	坂下 昭宣
		教授	平野 光俊